若越郷土研究　五十七巻一号

橋本左内の先見性について

三上一夫

一　課題

福井藩の橋本左内の先見的な卓見に精いっぱい照明をあてたいが、まず第一に雄藩連合の「日本国中を一家とみる」徳川統一国家の創出をどのように画策したかを検討する必要がある。

とりわけ日露同盟論ともいうべきかれの外交策に視点をすえた場合、親露反英の外交方式が、抜本的な幕政改革にかかわるわけで、その具体的な内容を考察することにする。

こうした左内の卓見が福井藩論として掲げられ、「将軍継嗣問題」を中心に、左内が藩主松平春嶽の謀臣として大いに活躍したが、旧来の幕閣専制を策する井伊政権により厳しく弾圧され、極刑に処せられる悲劇的結末に終ることになる。

ところが、政事総裁職として松平春嶽が主導する文久期幕政改革で、左内の卓見が再生することになるが、そのさい熊本藩から福井に招かれた横井小楠の極めて先見的な意見が深くかかわる点に着目せねばならない。要は左内の卓見よりはるかにレベルの高い小楠の働きによる再生がどのように見出されるかを検討することにする。

二　日露同盟論の外交策

アジアの大国たる中国がアヘン戦争（一八四〇～二）に敗れ、イギリスの要求に完全に屈服した事態に対して、左内は、次にわが国がこうしたイギリスの圧迫を直接受ける立場と判断し、かれの脳裏には、わが国の命運にかかわる歴史的な危機として受けとめたものとみてよい。

そこで左内としては、まずアメリカとの通商条約によって友好関係を結び、さらに大国ロシアとの間に攻守同盟を成立させることにより、イギリスと戦端をひらくも敢て辞せぬ態度で、国際社会に臨むのが最も得策だと判断する（拙稿「橋本左内の外交観について―日露同盟論を中心に―」（『社会文化史学』（3）昭和四十二年、五一～六一頁、参照））。

こうした日露同盟論ともいうべきかれの外交策が、安政四年（一八五七）十一月二十八日付けの村田氏寿宛書翰（『橋本景岳全集』（上）、五五二～四頁、以下『全集』と略称する）のなかに明瞭にうかがわれるので、次にその所説の大要を述べる。

只今の国際情勢をみると、将来五大州は一国となって同盟国となり、盟主を立てて戦争をやめることになるだろう。その盟主はイギリスかロシアのうちにあると思うが、イギリスは「慓悍貪欲」、ロシアは「沈鷙厳整」で、何れ後にはロシアへ衆望が帰するであろう。ところで日本はとても独立が難しい。独立するには山丹（沿海州）・満州から朝鮮国を併合し、アメリカまたは印度内に領地を持たなくては到底望みが達せられない。しかし当今としてはそれは甚だ困難である。なぜなら印度はヨーロッパに占領され、山丹あたりはロシアが手をつけ掛けているし、その上日本の力が現在不足しているので、強大なヨーロッ

パ諸国の兵に敵対して何年も戦争することは覚束ない。却って今のうちに同盟国になった方が得策である。そこで英・露は両雄並び立たないため、甚だ取り扱いにくい。その点「ハルレス（ハリス）」もすでに言明しているが、近来もこの両者が「争斗」した迹は明白である。そのため後日イギリスからロシアを伐つ先手を我が国に頼むか、または蝦夷・箱館を借り受けたいと要請するだろう。その際はイギリスを断然断るか、またはこれに従うか、いずれかの定まった方策がなければならない。ところで私は是非ロシアに従いたいと思う。その理由は、ロシアには信があり隣境であり、かつ日本とは「唇歯の国」である。我が国がロシアに従えばロシアは我を徳とするだろうが、イギリスは怒って我が国を伐つであろう。これは我が国のかえって願うところで、ひとり独立してヨーロッパ諸国の同盟に敵対は難しいが、ロシアの後援があれば、たとえ敗れても「皆滅」に至るようなことはない。そうなれば、この一戦で我が弱が強に転じ「危を安に」変ずることになって、わが日本も「真の強国」になるだろう。

以上のような左内の外交観は、緊張の度を増しつつある国際情勢下で、ロシアとイギリスの両国が極東の利権をめぐり抗争するに至るこの状況判断のもとに、わが国の場合、とりわけ蝦夷地（北海道）がかれらの経略の的となるのを危惧する。その際、イギリスに比べて「我とは唇歯の国」であるロシアを高く評価し、その友好・同盟関係により、イギリスの侵攻に対抗する親露反英の外交方式を述べるわけである。

三　めざす徳川統一国家の創出、その挫折

左内は「只管和親平穏」を望む幕府の日和見主義を厳しく批判して、抜本的な幕政改革を訴える。つまり人材・識見ともに優れた将軍のもとに、親藩・譜代・外様の差別をなくし、有能な人物をどしどし起用する。外様の薩摩藩主・島津斉彬が親藩の水戸藩の徳川斉昭や福井藩の松平春嶽とともに「国内事務宰相」に用いられるほどである。とりわけイギリスが虎視たんたんと狙う蝦夷地（北海道）に対しては、伊達遠州（注、宇和島藩主・伊達宗城）や土州侯（土佐藩主・山内豊信）を派遣して、さらに「内地の乞食・雲介の類に頭を立、相応の賄遣し、蝦夷へ遣し、山海の営致され、往来は重に海路より致し候はは、蝦夷も忽開墾相成るべく、航海術も直に熟すべくと存じ奉り候」（『全集』（上）　五五四～五頁）と、労働力として本土の乞食・雲介の類まで投入するという大がかりな経略策を主張する。

そこでこうした思い切った幕政改革のためには、雄藩連合の「日本国中を一家とみる」徳川統一国家の創出こそ先決だとする基本構想を表明したが、これが福井藩論として掲げられ、当面する「将軍継嗣問題」を中心に、左内が春嶽の謀臣として大いに活躍したのは周知のとおりである。

ところが旧来の幕閣専制を策する井伊政権の厳しい弾圧により、左内が極刑に処せられることにより、かれが真剣に目論んだ雄藩連合による徳川統一国家の構想は、すっかり瓦解することになる。

四　左内卓見の高レベルの再生へ
―小楠とのかかわり―

文久期の段階で、政事総裁職として松平春嶽の主導する幕政改革で、かつての左内の卓見が再生するが、その際横井小楠の極めて先見的な識見が深くかかわることにより、左内よりもはるかに高次元の再生が見出される。

つまり小楠が安政五年（一八五八）四月、福井城下に招かれて、左内に代わって福井藩論に大きなかかわりをもつことになる。小楠の場合は一応親露的な見解を表明しながらも、イギリスの海軍力が万国に冠たることを率直に認め、左内にあって看過されたクリミア戦争についても、小楠はその顛末をかなり的確に把握し、ロシアはイギリスの強大な軍事力には到底及ばないものと判断する。

当時の緊迫した極東情勢のなかで、左内が「日本国中を一家とみる」統一国家論をふまえ、「親露反英」の現実主義的かつ権謀術数的な外交策を提起したのに対して、小楠はロシア・イギリス両国につき、それぞれの国際場裡での立場を冷静な眼で評価する。

そして日本国の海軍強化策とともに、儒学の本源的な「堯舜三代の道」＝「仁政」を実践することにより、露・英はもとより他のヨーロッパ諸国も、ひとしくわが「仁政」に服し、自ずと望ましい国際秩序が回復できるという極めて高次元の倫理性に富む外交策をひれきするわけである。（小著『横井小楠の新政治社会像―幕末維新変革の軌跡』〈思文閣出版、平成八年〉五三頁）。

なにぶん小楠の構想による「国是七条」（山崎正董編『横井小楠遺稿』〈日新書院、昭和十七年〉九七～八頁）こそ、春嶽が推進する幕政改革の基本方針にかかわるもので、小楠としては、とりわけ旧来の幕閣専制の施政方針を改め、外様・譜代を問わず広く人材登用の実をあげ、「公共の政」＝「公議論」の実現をめざす点で、左内の雄藩連合の徳川統一国家論を基軸とする福井藩論につながることは明瞭である（拙稿「文久期における越前藩の幕政改革運動について」〈『日本歴史』二八八、昭和四十七年〉参照）。

五　総　括

橋本左内の先見的な卓見につき、まず第一に雄藩連合の「日本国を一家とみる」徳川統一国家の創出をどのように画策したかを具体的に考察した。

とりわけ「日露同盟論」というべき左内の外交策につき、親露反英の外交方式に集約される点で、その際の抜本的な幕政改革の内容に照明を当てることにした。

そこでこうした左内の卓見が、福井藩論として提起され、「将軍継嗣問題」をめぐり、かれが春嶽の謀臣として活躍したが、旧来の幕閣専制を策する井伊政権の厳しい弾圧により、左内の卓見はすっかり挫折する羽目となった。

ところが文久期の段階で、政事総裁職として松平春嶽が主導する幕政改革で、かっての左内の卓見が再生するが、その際横井小楠の極めて先見的な識見が深くかかわることにより、左内よりもはるかにレベルの高い再生が見出されるわけである。